

## 狐越街道

神村ふじを

山形には多くの峠越えの道があるが、村山地方と置賜地方を結ぶ「とんと昔」に出てきそうな名前の街道がある。狐越街道である。

山形城下から置賜上杉領の北端（現 西置賜郡白鷹町）に至る道筋は、江戸時代には狐越・中越・築沢の三道があったそうだが、明治20年（1887）、狐越の新道が開削されて狐越街道と呼ばれ、これが主要道となった。その後狐越街道は改修され、現在は白鷹山の北側を県道17号線（主要地方道山形白鷹線）が通り、県都山形と置賜を結ぶ主要道の一つとなっているが、この道筋は明治の狐越街道とは異なっている。

白鷹山は、山頂に行基の開基と伝わる虚空蔵尊を祀り、村山地方と置賜地方の境に位置しているため、境虚空蔵とも呼ばれている。何でも行基が当地を訪れた際、山上に白鷹が舞ったとの伝説があり、山の名前の由来となっている。名君の誉れ高い米沢藩第九代藩主上杉治憲は、隠居後この白

鷹山に因み自らを鷹山と称したと言われている。

この狐越街道は、虚空蔵尊への参拝路としても村山地方と置賜地方を結ぶ連絡路としても重要な役割を担っていたのである。特に明治になってから、桑の葉が行き来する商業の道として繁栄したのである。

お蚕様と様付けで呼ばれる蚕。絹糸の原料となる繭を吐き出す貴重な蚕。白鷹山を境にして、東側の西山形周辺と西側の荒砥周辺では、桑の葉が開くのに一週間ほど差があったようで、西山形周辺の桑が盛んに置賜地方に運ばれた。さらに、西山形柏倉村の名主伊藤五郎治が作ったと言われる、寒さ、病害虫に強い桑の新品種（五郎治早生）が現れ、物流に拍車を掛けた。

製糸が一大産業になりつつあった時代、五郎治早生が西山形周辺で栽培されるようになると、養蚕地置賜では桑の葉の需要が急速に高まり、膨大な量の五郎治早生が白鷹山を越え、山形から置賜へともたらされることになった。その通り道となったのが狐越街道だったのである。

ところが、その繁栄もやがて終わりの時を迎える。大正12年（1923）、奥羽本線赤湯駅から荒砥駅まで長井線（現 山形鉄道フラワー長井線）が全線開通したのである。この開通により荒砥から鉄道で奥羽本線と連絡できるようになると、もっぱらこちらが利用されるようになり、狐越街道の往来は次第に減っていったのである。

戦後の昭和25年（1950）には、現在の県道17号線（主要地方道山形白鷹線）の畑谷を回る道

がバス道路として整備され、バスが行き交うようになった。

そして平成4年（1992）に国道348号線 小滝街道が大改修され、荒砥から山形まで約40分で結ばれるようになるまでは、西置賜と山形を結ぶほぼ唯一の幹線道路として利用されていたのである。この改修により狐越のバス道路は、現在は国道348号線を通る路線となり、山形から長井まで運行されるようになっていた。

まだバスが県道17号線を通って山形と荒砥を結んでいたときのこと。バスは山形市の山交ビルから発車。山形駅西側の停留所を数カ所回って門伝もんでんに至り、富神山とみやまを右前方に見ながら次第に高度を上げて行く。山王、七ツ松、萩窪、礫石つぶていしと、坂道と急カーブの連続となり、やがて畑谷大沼に着く。ここからは荒砥に向かいゆっくり下って、中山、萩野、十王を経て終点の荒砥。

山交ビルから乗ったばん（婆）ちゃん。市内を巡っている間にうとうとし始めた。近くで降りる気配はまったくなく。バスは門伝を過ぎ山王、七ツ松、萩窪を通過、礫石の停留所に近づいたとき、ばんちゃんはやっと目を覚まし、慌てた様子で運転手に声を掛けた。「七ツ松で降りんなだけんと、乗り過ぎしてしまはずは。運転手さんあんまり運転上手で眠らしてしまたけのは」。運転手はうんうんと頷き礫石に停車。バスの運転台から降りると手を挙げて山形方面に下っていく車に声を掛けた。「このばんちゃんば七ツ松まで乗せてってけねが」。話は「はい了解」。ばんちゃんを車に乗せてバスは出発。

こんなことは令和の今の時代はできないのかも知れないが、何とほのぼのとしていい話ではないか。お互いを思いやるちょっとした気持ちがあんなにもすがすがしい気分にしてくれる。こんなちょっとした思いやりがそこそこにあつたら、まだまだ住みやすい世の中になるのではと思う昨今である。

立秋や風まだぬるし狐越 ふじを

\*参考サイト「新・県民ケンちゃん」狐越3

[http://psyzans.com/Newken/Kitsume/Kitsume\\_3](http://psyzans.com/Newken/Kitsume/Kitsume_3)